

口永良部島の火山活動解説資料

福岡管区气象台
地域火山監視・警報センター
鹿児島地方气象台

＜噴火警戒レベルを2（火口周辺規制）から3（入山規制）に引き上げ＞

口永良部島では、新岳火口付近の浅いところを震源とする規模の大きな地震が短期間で複数回発生しており、火山活動が高まった状態となっていることから、本日（28日）00時15分に火口周辺警報を発表し、噴火警戒レベルを2（火口周辺規制）から3（入山規制）に引き上げました。

【防災上の警戒事項等】

新岳火口から概ね2kmの範囲（図1）では、噴火に伴う弾道を描いて飛散する大きな噴石及び火砕流に警戒してください。また、向江浜地区から新岳の南西にかけての火口から海岸までの範囲では、火砕流に警戒してください。

風下側では、火山灰だけでなく小さな噴石が遠方まで風に流されて降るおそれがあるため注意してください。

地元自治体等の指示に従って危険な地域には立ち入らないでください。

○ 活動概況（図1～6）

口永良部島で27日21時33分に新岳火口付近の浅いところを震源とする規模の大きな地震が発生しました。山麓で体に感じるものではありませんでしたが、18日にも規模の大きな地震が発生しており、火山活動が高まった状態となっていることから、28日00時15分に火口周辺警報を発表し、噴火警戒レベルを2（火口周辺規制）から3（入山規制）に引き上げました。

火山性地震は少ない状態で経過していましたが、18日には新岳の西側山麓のやや深い場所が震源と推定される火山性地震が9回発生するなど、新岳火口付近の地震を含めると日回数は18回となり、一時的に多い状態となりました。

GNSS連続観測では、島内の長い基線で2016年1月頃から続いていた緩やかな縮みの傾向が、2018年7月頃から停滞しています。

東京大学大学院理学系研究科、京都大学防災研究所、屋久島町及び気象庁が実施した観測では、火山ガス（二酸化硫黄）の放出量は、26日及び27日に100トンとやや多い状態で経過しています。

新岳火口では、2月3日以降、噴火は観測されていませんが、火山活動が高まった状態になっています。

この火山活動解説資料は福岡管区气象台ホームページ（<https://www.jma-net.go.jp/fukuoka/>）や気象庁ホームページ（https://www.data.jma.go.jp/svd/vois/data/tokyo/STOCK/monthly_v-act_doc/monthly_vact.php）でも閲覧することができます。

資料で用いる用語の解説については、「気象庁が噴火警報等で用いる用語集」を御覧ください。

<https://www.data.jma.go.jp/svd/vois/data/tokyo/STOCK/kaisetsu/kazanyougo/mokuji.html>

この資料は気象庁のほか、国土地理院、京都大学、東京大学、国立研究開発法人防災科学技術研究所、国立研究開発法人産業技術総合研究所及び屋久島町のデータも利用して作成しています。

資料中の地図の作成に当たっては、国土地理院長の承認を得て、同院発行の『数値地図50mメッシュ(標高)』を使用しています（承認番号：平29情使、第798号）。



図1 口永良部島 警戒が必要な範囲
新岳火口から概ね2kmの範囲（赤太線）

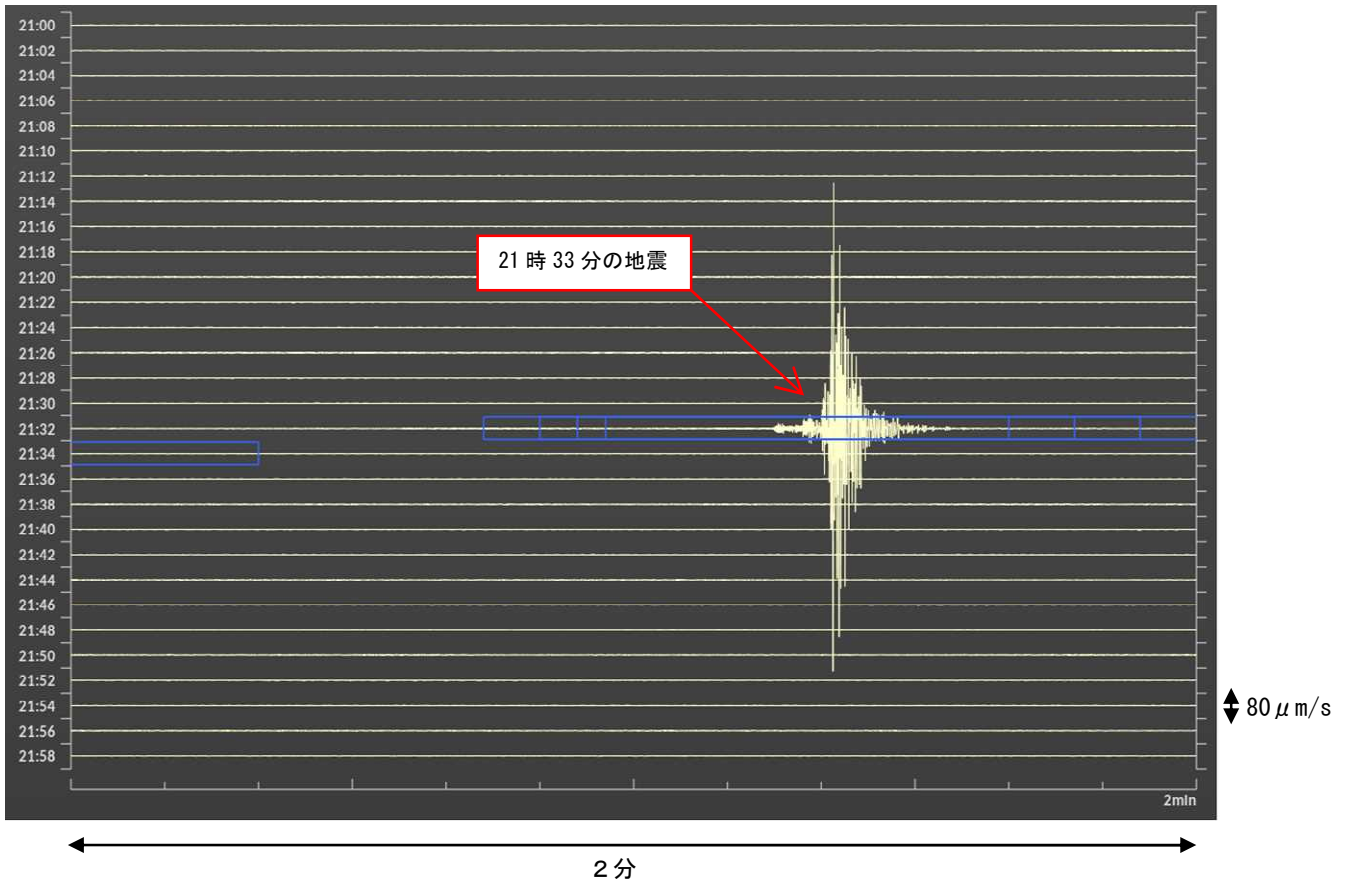


図2 口永良部島 地震波形（野池山3観測点：南北動 10月27日21時00分～22時00分）
27日21時33分に新岳火口付近の浅いところを震源とする規模の大きな火山性地震が発生しました。

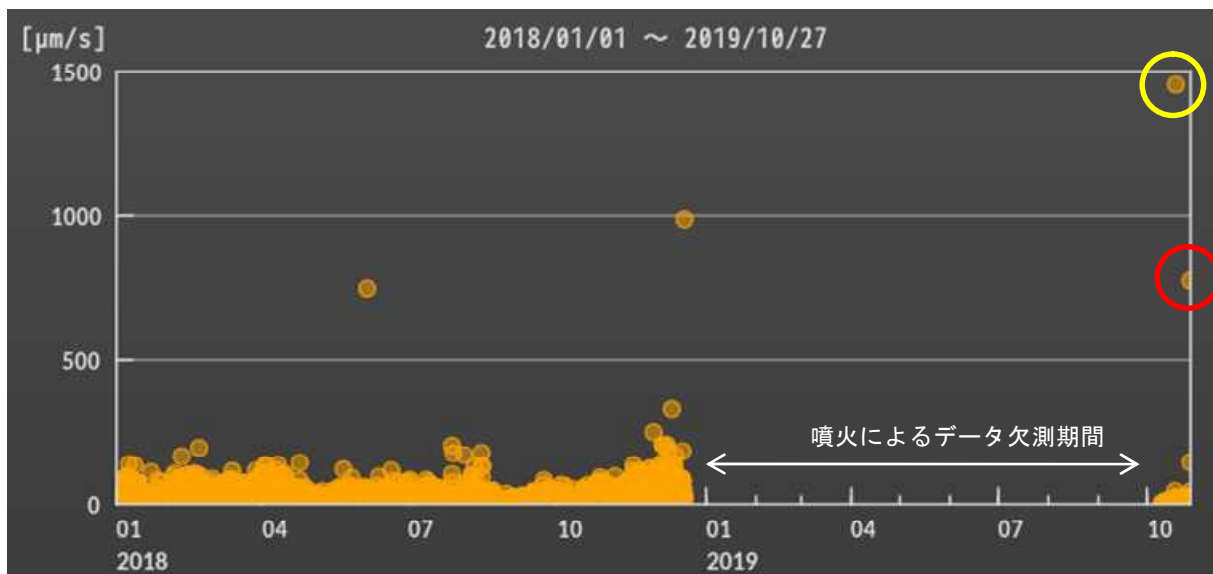


図3 口永良部島 最大振幅時系列（野池山3観測点：南北動 2018年1月～2019年10月27日）
27日21時33分の火山性地震の最大振幅は774 $\mu\text{m/s}$ でした（赤丸）。18日にも規模の大きな地震が発生しており（黄丸）、火山活動が高まった状態となっています。

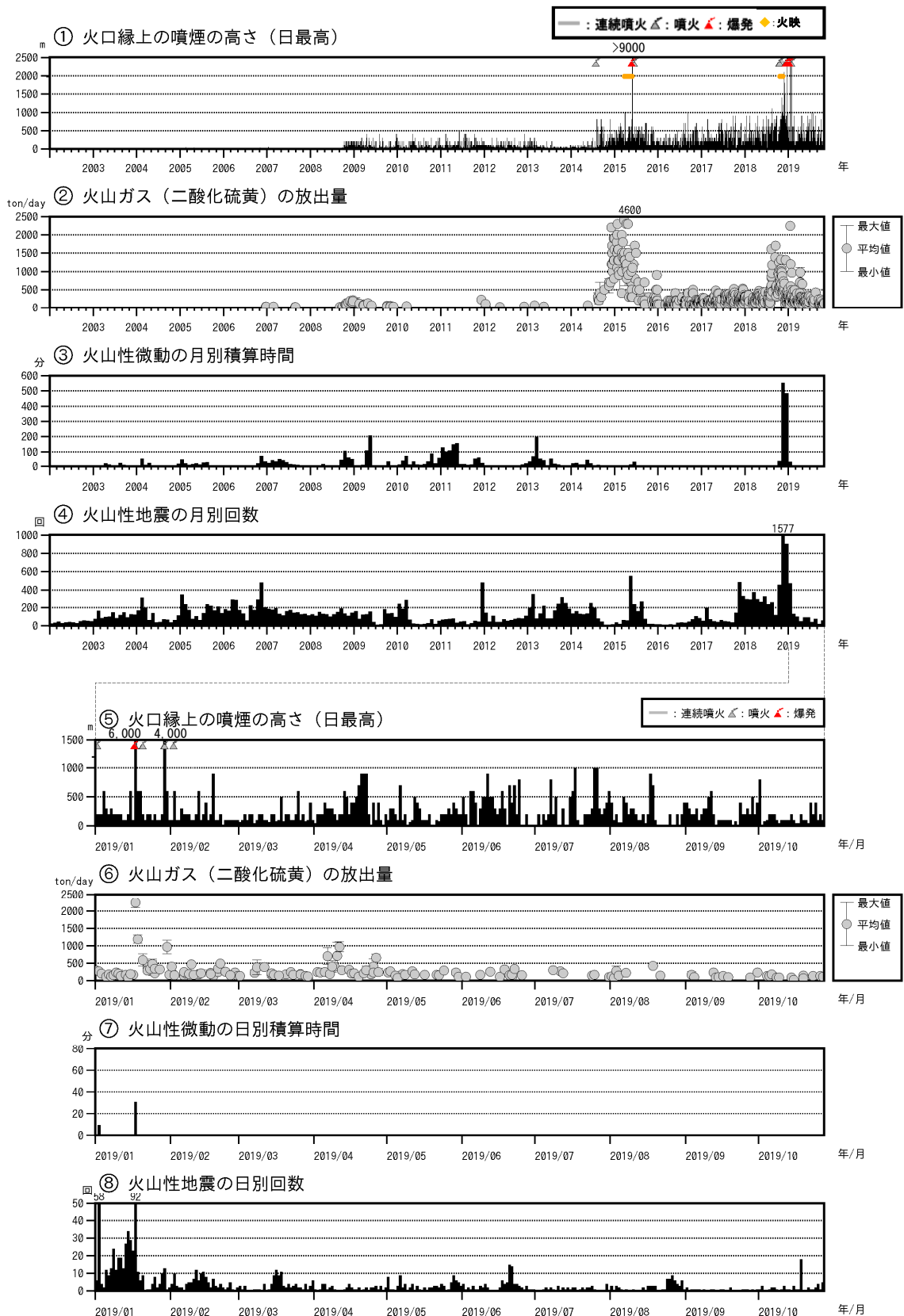


図4 口永良部島 火山活動経過図（2002年1月～2019年10月27日）

- ・新岳火口では、2月3日以降、噴火は観測されていません。
- ・東京大学大学院理学系研究科、京都大学防災研究所、屋久島町及び気象庁が実施した観測では、火山ガス（二酸化硫黄）の放出量は、26日及び27日に100トンとやや多い状態で経過しています。
- ・火山性地震は少ない状態で経過していましたが、18日には新岳の西側山麓のやや深い場所が震源と推定される火山性地震が9回発生するなど、新岳火口付近の地震を含めると日回数は18回となり、一時的に多い状態となりました。

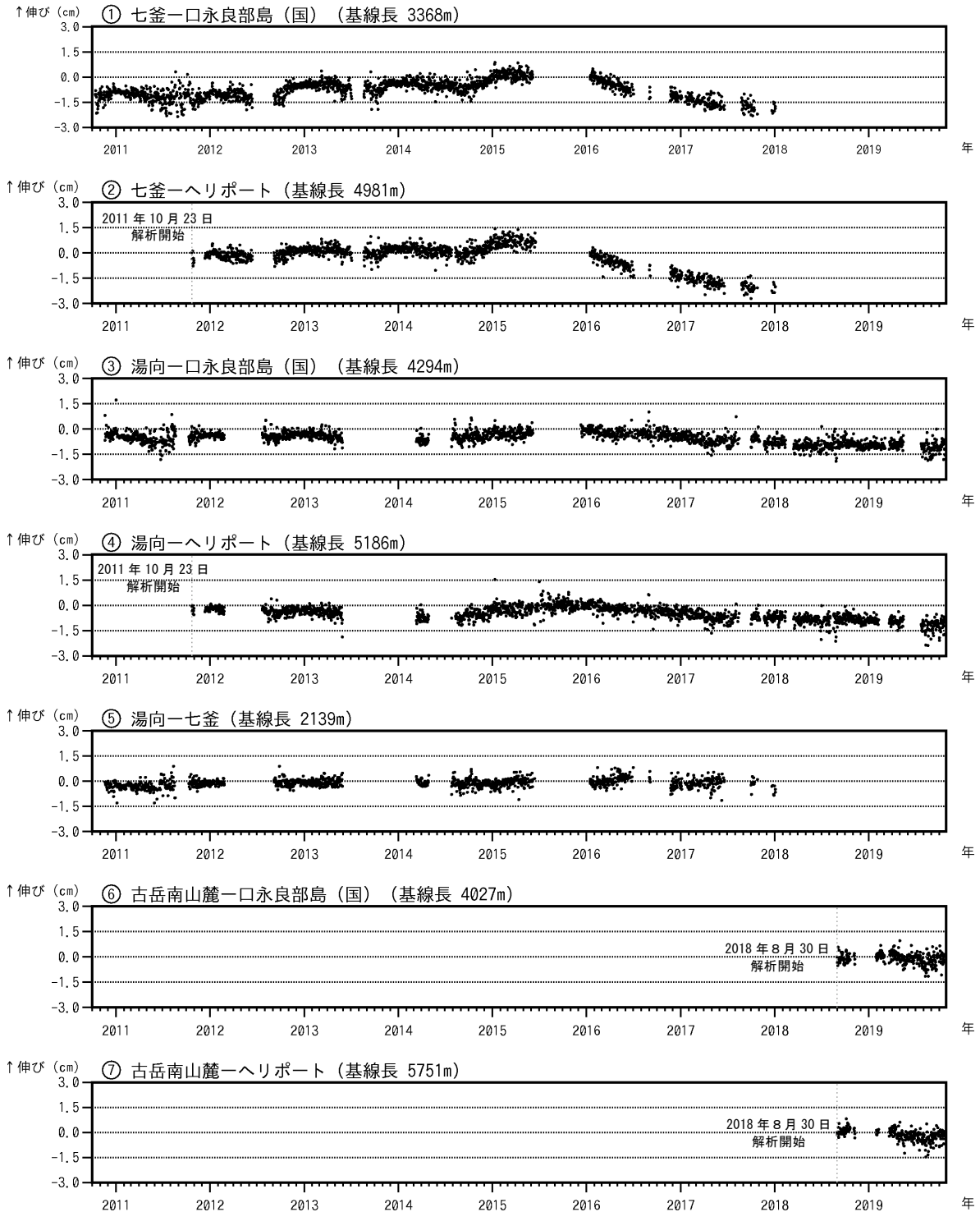


図5 口永良部島 GNSS 連続観測による基線長変化 (2010 年 10 月～2019 年 10 月 27 日)

GNSS 連続観測では、島内の長い基線 (③④) で 2016 年 1 月頃から続いていた緩やかな縮みの傾向が、2018 年 7 月頃から停滞しています。

これらの基線は図 6 の①～⑦に対応しています。

基線の空白部分は欠測を示しています。

2016 年 1 月以降のデータについては、解析方法を変更しています。

(国)：国土地理院

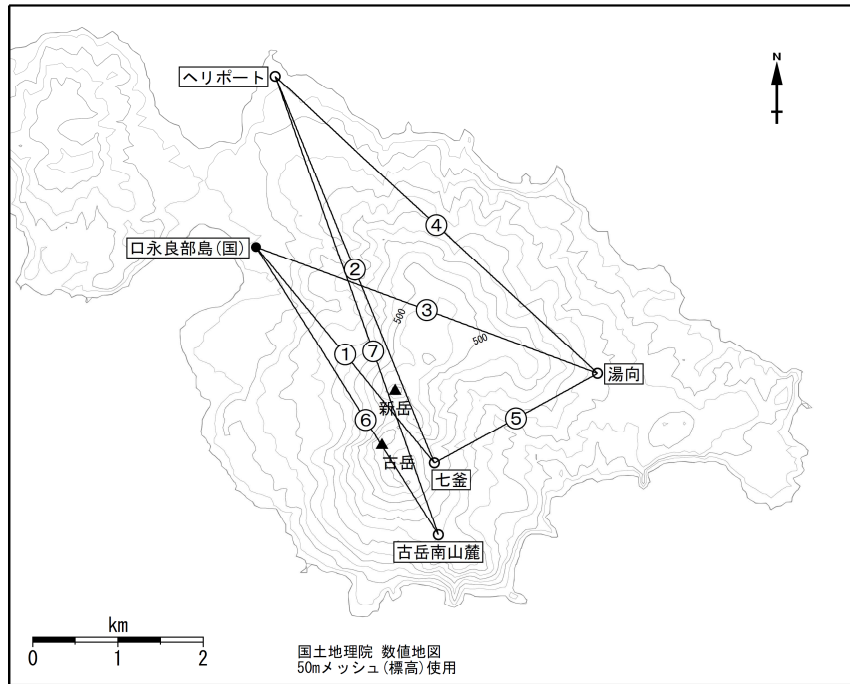


図6 口永良部島 GNSS 連続観測点と基線番号

小さな白丸 (○) は気象庁、小さな黒丸 (●) は気象庁以外の機関の観測点位置を示しています。
(国) : 国土地理院

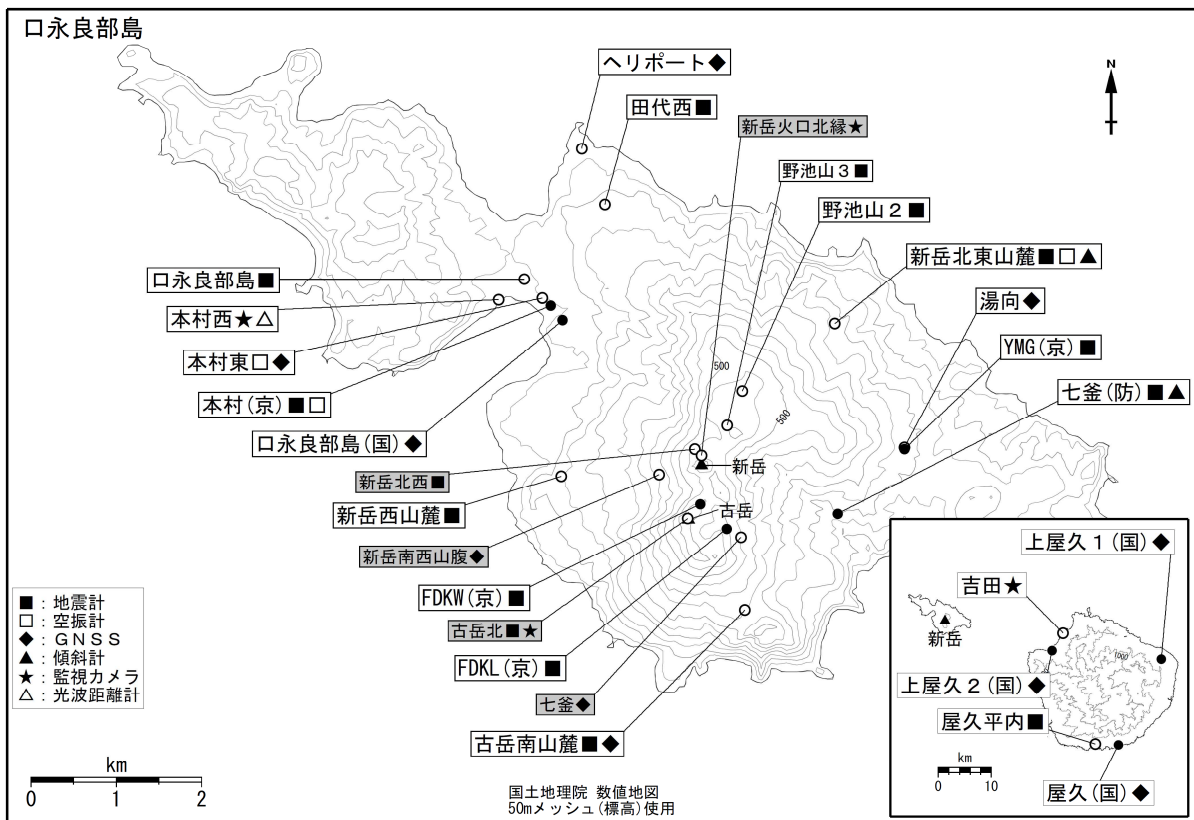


図7 口永良部島 観測点配置図

小さな白丸 (○) は気象庁、小さな黒丸 (●) は気象庁以外の機関の観測点位置を示しています。
(国) : 国土地理院、(京) : 京都大学、(防) : 防災科学技術研究所

図中の灰色の観測点名は、噴火等により長期障害となっている観測点を示しています。